

りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年五月第三号

仏徳讃歎に恵まれ、その名号を聞いて信心歓喜すること

ご讃題

南無阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになるとなり

(『尊号真像銘文』註釈版聖典 P655)

### 一、名号讃歎、仏徳讃歎が私に至り届いた系譜

気がついたときは行住坐臥にふと「なんまんだぶ」と念仏する父方の祖父がいました。けれども、住職の表も裏も見ているご門徒さんは「ご院さんの念仏は「空(から)念仏じゃ」とやゆしました。それを耳にして素朴に腹を立てる何とも懐かしい祖父でありました。祖父は廣島の出身でしたから当院には廣島の念仏者の息吹が伝えられたこととなります。

母方の祖母は近江で生まれ近江に嫁いだ人でありました。末の妹がなくなったときは人知れず涙し夜の夜中に起きてご本堂でお正信偈をあげておりました。私たち孫に問わず語りに聴かせてくれたものは、妹を失って悲しむ姿の中にも阿弥陀如来様のお慈悲を慶ぶ言葉でありました。「ありがたいやないけ」と。

風情は異なるものの、人間世界で、仏徳讃歎の姿を示してくれた肉親の忘れもしない二つの姿でありました。釈尊が阿弥陀如来の仏徳を讃歎なさったお姿は、こうして私の許に伝えられたのです。

長じて私は、一年に一度は、瓜生津隆雄和上のご法座に連なっておりました。それは「大蔵会法座」と称して和上のご自坊の法城寺様で営まれる伝統のご法座でありました。ご法座では、毎年のように「浄土真宗の根本義(本願成就文)のお話」についてお聞かせに与ったのであります。その頃の(今も)私は教学の素養がありませんからずっと身体を通してお話をお聞かせに与っていたのであります。

和上の追悼文集を繙きますと、「奥深くて理解及びかねるお話も、毎年繰り返してお聞かせに与ること自体に、遙かな故郷に帰るような心地、大きな親の懷に抱かれる思いで安堵するのを覚えた。「ユルサレテキク」(大行釈「聴聞」の左訓、註釈版 P145)とは、さながらこういうことをいうのであろうか。」とあります。

そのとき、私は、まぎれもなく和上の仏徳讃歎のお声に触れていたものであります。仏徳讃歎のお声を耳にするとき(聞其名号)、愚かな衆生の胸が揺るがされるのであります。これを「信心歓喜」と言います。

仏徳讃歎のお声を聞かせて戴いて、それがそのまま私の体の中に沁み入るのです。それ故、浄土真宗では十八願成就文に謳われた「聞其名号(もんごみょうごう)」と「信心歓喜(しんじんかんぎ)」の間には余計な要素が全く介在しないから「聞即信(もんそくしん)」がその特徴であり、浄土真宗は端的に「聞(もん)」の宗教だといわれてきたのであります。

み教えが人から人に伝わる所以であります。

その名号を聞いて信心歓喜する第十八願成就文の「其の名号」は第十七願成就文の「諸仏如来の名号讃歎」を受けています。

ところが、「名号讃歎」等ということは、仏でなくては讃歎することができないとお聞かせ戴くことであります。仏のお徳は仏以外の者にはおよそはかり知ることもお徳だからです。

「安養浄土(あんりょうじょうど)の莊嚴は

唯仏与仏(ゆいぶつよぶつ)の知見なり

究竟(くきょう)せること虚空(こくう)にして

廣大にして辺際なし」(Ref『高僧和讃 天親讃』註釈版聖典、P580)

それ故、「諸仏如来の名号讃歎」というのは、娑婆世界では、歴史的には一仏一国土のお釈迦如来が最初だということになるのであります。

そのお釈迦如来の名号讃歎の尊いお姿が七高僧を経て親鸞聖人に伝わり、お弟子様、篤信の父祖に伝えられ、如来様のお慈悲をお慶びなさったお爺 婆さんの感動の後姿となって私に伝ったことが判ります。

「仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言(おんしゃくきょごん)したまふべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや、

法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもってむなしかるべからず候か」(Ref『歎異抄第二条』『註釈版聖典』P832)。

こうして私にまで伝えられた仏徳讃歎の道行が明らかになりました。

けれども、ここで一つの問題が生じます。

いかなるこの世の風情に接してさえずるすべては如来様のお姿と尊ぶ程の聖者は別として、凡夫の日常生活では、いつも篤信のお同行の仏徳讃歎のお姿にあうことができるわけではありません。そもそも「仏徳讃歎」等という大それたことは、仏以外にはできないことなのだと先に申したことであります。

では一体、愚かな凡夫である私達は、どうすれば仏徳讃歎のお声をお聞かせに与るのでしょうか。

## 二、私における名号讃歎、仏徳讃歎とは何か

ご開山聖人は次のようにおっしゃっておいでです。

「南無阿弥陀仏をとらふるは、仏をほめたてまつるになるとなり(『尊号真像銘文』註釈版聖典 P655)」と。

ご開山聖人のこのご文のお導きによってこの私にも名号讃歎、仏徳讃歎の道が開かれてあるのです。なんとありがたいことでしょう。

この私には阿弥陀如来様のみ手ですべて仕上げたお名号を称する行いによって仏徳讃歎することになるのだということです。

これで私一人でも「南無阿弥陀仏」と称えれば、称えるその行い一つに

よって仏徳讃歎することになるのです。

「南無阿弥陀仏」と称えれば、聞こえて下さるものがあります。それはわが声ながら聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」のお名号であります。

すると「聞其名号」とは、称えれば聞こえて下さる「南無阿弥陀仏」のお名号に聞き入ることが私にとっての「聞其名号」になるのであります。

これについて、原口針水和上は、  
**われ称え われ聞くなれど なもあみだ**

**つれてゆくその 親の呼び声** とお歌いになり、  
京都女子学園の創設者でいらっしゃった甲斐和里子女子は詩集「草かご」の中で、既に居ますみ親の存在をしかとかみしめ、み親に甘えるが如き姿で次のように謳いあげていらっしゃいます。

**御仏(みほとけ)を呼ぶわが声はみほとけの**

**われを喚(よ)びますみこ系なりけり**

まことに「称名念仏」は、そのまま仏徳讃歎になるのですから、わが声ながら称えれば聞こえて下さるそのお名号に聞き入るとき、私を喚びさまそうとなさる如来様の本願招喚の勅命(ほんがんしょうかんのちよくめい)をお聞かせに与っているものであります。

かくして名(みな)に聞き入る私の姿は如来様の仰せを仰せの通りに受け止めている姿ですから、仰せに対して疑いの蓋を雑(まじ)えない状態が実現しており、それは信心(信楽)に他ありませんから、このとき私は信心を頂戴しているものであります。合掌(玄宥記)。

正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 0一六六
<a href="mailto:mhkatata@pluto.dti.ne.jp">✉-♪ mhkatata@pluto.dti.ne.jp</a> 使務 堅田玄宥